

# 『詩經』における「風」の表現について

増野弘幸

『詩經』には風を用いた表現がいくつも見られるが、その中で特に強風を用いた表現が目につく。例えば、**邶風終風**一章は次の様になっている。

終風且暴 終風且つ暴

願我則笑 我を願みて則ち笑ふ

謔浪笑敖 謔浪笑敖す

中心是悼 中心是れ恨む

終日吹く風は激しく、自分を振り返って見てからかい笑物にする。自分の心は傷み悲しむのだ、とあり、或る人から笑い物にされる自分の憂いを述べている。

ここでは第一句目で終日吹く激しい風の様子が詠じられた後に、自らが笑い物になる辛さを言うのであるが、一句目の「終風」と後の内容とは当然関連があると言えよう。

即ち「終風」が吹きつける激しさが作者の憂苦の気持ちを象徴的に表現しているのであり、激しい風の表現を用いる

ことによって自らの苦しみをより強く伝えようとしたのであろう。そこには激しい風が憂苦の情を連想させるといふ当時の人々の共通の認識があった筈である。では何故その様な認識が生まれたのであろうか。本稿ではこの様な強風の表現が、気候と生活との関わりに由来する発想によって作られたのではないかと言う点について論じてみたい。

## 一、『詩經』における風の用例

『詩經』において風が登場する詩は十七篇である。列挙すると次の如くである。

一 絺兮綌兮 絺や綌や

凄其以風 凄として其れ以て風ふく

二 終風且暴 終風且つ暴 (邶風・緑衣第四章)

終風且霾 終風且つ霾 (邶風・終風第一章)

(第二章)

三 終風且噎 終風且つ噎る (第三章)  
凱風自南 凱風南よりし

吹彼棘心 彼の棘心を吹く (邶風・凱風第一章)

凱風自南 凱風南よりし

吹彼棘薪 彼の棘薪を吹く (第二章)

四 習習谷風 習習たる谷風

以陰以雨 以て陰り以て雨ふる

(邶風・谷風第一章)

五 北風其涼 北風其れ涼たり

雨雪其雱 雨雪其れ雱たり (邶風・北風第一章)

北風其喈 北風其れ喈たり

雨雪其霏 雨雪其れ霏たり (第二章)

六 蓀兮蓀兮 蓀や蓀や

風其吹女 風其れ女を吹く (鄭風・蓀兮第一章)

蓀兮蓀兮 蓀や蓀や

風其漂女 風其れ女を漂く (第二章)

七 風雨淒淒 風雨淒淒たり

鷄鳴喈喈 鷄鳴くこと喈喈たり

(鄭風・風雨第一章)

風雨瀟瀟 風雨瀟瀟たり

鷄鳴膠膠 鷄鳴くこと膠膠たり (第二章)

風雨如晦 風雨晦の如し  
鷄鳴不已 鷄鳴きて已まず (第三章)

八 匪風發兮 匪の風発たり

匪車偈兮 匪の車偈たり (檜風・匪風第一章)

匪風飄兮 匪の風飄たり

匪車嘒兮 匪の車嘒たり (第二章)

九 風雨所漂搖 風雨の漂揺する所

予維音嘒嘒 予維れ音嘒嘒たり

十 風雨攸除 風雨の除る攸 (豳風・鸛鳴第四章)

鳥鼠攸去 鳥鼠の去る攸 (小雅・斯干第三章)

十一 彼何人斯 彼は何人ぞ

其爲飄風 其れ飄風たり (小雅・何人斯第四章)

十二 習習谷風 習習たる谷風

維風及雨 維れ風及び雨 (小雅・谷風第一章)

習習谷風 習習たる谷風

維風及頽 維れ風及び頽 (第一章)

習習谷風 習習たる谷風

維山崔嵬 維れ山崔嵬たり (第三章)

十三 南山烈烈 南山烈烈

飄風發發 飄風發發 (小雅・蓼莪第五章)

南山律律 南山律律

飄風弗弗 飄風弗弗

(第六章)

廿 多日烈烈 冬日烈烈

飄風發發 飄風發發

(小雅・四月第三章)

卅 有卷者阿 卷たる阿有り

飄風自南 飄風南よりす

(大雅・卷阿第一章)

卅 如彼邇風 彼の風に邇ふが如く

亦孔之優 亦孔だ之れ優ぶ (大雅・桑柔第六章)

大風有隄 大風隄有り

有空大谷 空たる大谷有り

(第十二章)

大風有隄 大風隄有り

貪人敗類 貪人類を敗る

(第十三章)

卅 吉甫作誦 吉甫誦を作る

穆如清風 穆として清風の如し

(大雅・烝民第八章)

以上の風の用例について見ると、九については鷓鴣の巢を風雨が揺らし、十では堅牢な建物が風雨を防ぐことを言う。これらの場合、風は単に自然現象として詠じられていると言える。七の「清風」は詩の内容を喩えたものである。

しかし、他の例においては、風は何らかの象徴的意味を

持っていると言えよう。例えば一においては寒風が吹く表現の後に「我思古人、実獲我心（我古人を思ふに、実が心を獲たり）」と苦しい境遇にある自分の気持ちが述べられており、二では、前述の如く終日激しく吹く風の表現の後に笑い物にされる自分の憂苦が述べられている。

この様に風が何らかの形で内容と関わっている。これらの中で六では風で葉が落ちることにより女子が男に従うことを言い、七では風雨の激しさによって相手を思う気持ちの激しさを表現している。五では曲がりくねった丘に南からの旋風が吹きつけることで楽しみ和らぐ君子が来ることを言っている。この三例における風は内容との関連から見て、六においては男からの誘い、七では恋慕の情の激しさ、五では君子をそれぞれ象徴しているのである。

次に、これらを除いた十一例における風象徴するものについて考えてみると、この十一例における風は、激しい風、寒い風、北風、一日中吹く風等、強い風ばかりである。さらに、その表現が伴なう詩の内容は、一では自分が苦しい境遇にあること、二は自分が笑い物にされる辛さ、三では七人の子を抱えた母親の苦勞、四・五では棄てられた女の苦しみ、五では嘘や邪悪さに満ちた現状から去ろうとする気持ちを描べている。八では周への道を振り返り心

の中が傷むこと、士では或る人物に対して心が掻き乱されること、三・十句では自分一人が苦しい目に遇うこと、六では国の混乱を憂うること、と言った憂苦を述べる内容ばかりである。

この様に、風が用いられている詩の中で、特に、強い風と人間の苦しみに発想の点で、関連があると言わねばならないであろう。<sup>(1)</sup>

風の表現について一の「凄」は毛伝に「凄、寒風也」とある如く、寒風の吹きすさぶことを言う。二の「終風」は「終日風為終風」と毛伝にもある様に、一日中吹く風である。三の「凱風」は毛伝に「南風謂之凱風」とあり、他の注釈家も多くこれに倣い南風と解している。これに対し聞一多は『詩経通義』の凱風の項で、『詩経』において風は暴怒の男に比せられることが多く、この場合も風は父親を意味すると指摘し、さらに又、「豈」字が「大」の意に用いられることが多い点や、大雅卷阿に「飄風自南」とある点から、「凱風」は和楽の風ではないとしている。この指摘に従えば、「凱風自南」は「大風が南より吹く」の意となり、第二章におけるこの表現の次の句の「棘」即ちイバラについて、集伝が「非美材」とするような良くないイメージとも合うのではないかと思われる。四の「習習谷風」

は毛伝では「習習、和舒貌、東風謂之谷風」とし、和らぎ吹く東風と解するが、宋の嚴粲は『詩輯』巻四において「来自大谷之風、大風也。盛怒之風也。又、習習然連続不断、所謂終風也」即ち、一日中吹く大風であるとし、清の姚際恒や方玉潤、(2)聞一多(4)もこの説を支持している。やはり二句目とのつながりの点から見ても嚴粲の説が妥当と言えよう。五の「北風」は毛伝に「寒涼之風」とある如く寒々と吹く北風である。八の「匪風発兮」については、諸家見解を異にしており、毛伝は「発発飄風、非有道之風」として有道でない風が激しく吹くとし、集伝は「今非風発」とし、平時は風があれば憂えるが、今は風が吹いている訳でもないのに憂えるとする。清の馬瑞辰は『毛詩伝箋通釈』巻十四で「彼匪古通用」とし、彼の風が激しく吹く、と解している。いずれが正しいか判じ難いが、「風発」の意味について、風が激しく吹くとする点では三家一致している。今は馬瑞辰の説に従っておきたい。二句目の「飄」は毛伝では「廻風為飄」とあり、つむじ風を言う。十の「飄風」は毛伝に「飄風、暴起之風」とある如く。暴風、つむじ風の類であることは諸家一致している。六の第六章「如彼遘風」についての鄭箋には「使人喑然郷疾風不能息也」とあり疾風に向かい息ができないことを言い、第十二

章の「大風有隄」について毛伝は「隄、道也」とするが、清の王引之の『経義述聞』巻七では「隄之言迅疾。有隄、形容其迅疾也」とし、馬瑞辰<sup>(6)</sup>、松本雅明、目加田誠<sup>(7)</sup>の三氏もこの見解を支持している。これに従って解釈すれば、大風が急であることを言ったものである。

この様に十一例における風は皆暴風とも言える強風であるが、その後に来る憂苦の内容とは発想の点でどの様な関わりがあるのかを以下に述べてみたい。

## 二、中国の気候について

十一例における強風と憂苦の関わりを知る上で、まず重要なことは中国の風がどの様な性質を持っているかという点である。そこで中国の気候について考えてみたい。

大陸性季節風気候を有する中国は、冬はシベリア高気圧からの強い北西風・又は西風に曝され、夏季には太平洋高気圧からの東南の季節風が吹くと言ふ具合に冬季と夏季で全く逆の風の影響を受けている。夏の季節風は水害や干魃をもたらす反面、風力も冬よりは弱く、農業にとっても大変有益なものである。<sup>(8)</sup>

これに対して十月から翌年三月位迄の冬の乾燥した寒冷な季節風は強く、寒波に見舞れると温度が急下降し、強

風・雹・雷雨等をともない、家屋・樹木を倒したり農作物に被害を与える。<sup>(9)</sup>

又、冬の季節風は砂塵を伴ない、風沙現象を起こす。前掲の邶風終風第二章における「霾」がそのことを言っており、毛伝では「霾、雨土」とある。この「つちぐもり」現象は現在でも見られ、農業においても、畑の上に堆積し埋没させる等の被害を与えている。当時においても同様の風害が発生していたと言えよう。

又、四月から六月にかけて華北からモンゴルあたりまで乾燥高温の「乾熱風」が南から吹き農作物に害を与える。<sup>(10)</sup>

張秉権氏が指摘される様に殷代より現代迄の気候差がそれ程にはないとすれば、<sup>(11)</sup>当時の人々にとってもこれら風沙・強風・乾熱風等は生活上の脅威であつたと言えよう。<sup>(12)</sup>

## 三、風祭について

次に『詩経』の時代の人々が、こういった生活に脅威をも与える風に対してどの様な気持ちを抱いていたかについて考えてみたい。

殷代には風は神として祀られ、胡厚宣氏によれば豊作を祈求する対象となっていた。<sup>(13)</sup>強風に対しては、それを止めるために犬を犠牲とする「寧風」の祭祀が行なわれてい

た。このことから殷の人々にとっても強風が何如に脅威であつたかが窺われる。

では周代以降はどうであつたらうか。

『周礼』春官小祝には次の様にある。

順豊年、逆風雨、寧風旱。

(豊年に順ひ、時雨を逆へ、風旱を寧す。)

即ち風による乾燥を寧んずるのである。また、『周礼』春官大宗伯には次の様にある。

以禋燔祀司中司命飊師雨師。

(禋燔を以て司中司命飊師雨師を祀る。)

ここにおける「飊師」とは「風師」即ち風神のことであるが、柴を焚いてこれを祀るのである。

『爾雅』积天とその郭璞注には次の様にある。

祭風曰磔。

〔郭注〕今俗當大道中磔狗、云以止風。此其象。

(風を祭るを磔と曰ふ。〔郭注〕今の俗に大道中に当りて狗を磔し、云ひて以て止風とす。此れ其の象なり。)

晋代の風を止める習俗に基づいた郭注の解釈によれば、ここでも殷代と同様に犬を以て風を抑えようとしているのである。

以上の三例から『詩経』の詩の作られた時代にも殷代に

おける「寧風」と同様に風を祀る祭祀が行なわれていたと言えるのである。『周礼』春官小祝では、風祭の目的が農業に関わっており、このことは『詩経』の詩の作られた頃においても、殷代と同様、農作物に対する風害について当時の支配層が敏感にならざるを得なかったことが窺われる。まして直接に農業生産を行なう農民達にとっては一層深刻な問題であつたと言えよう。

この点から強風の表現を持つ『詩経』十一例の詩を考えると、強風が詠じられた後に自らの憂苦を述べることは、当時の人々にとって風が常に心配や不安の種であつたことと深く関わっていると見え、殊に、擗風終風において風沙現象が述べられているのは、当時の人々の風害に対する関心の深さを顕著に示す例であると言えよう。

#### 四、風害の記述

では、前掲『詩経』十一例の頃の風害についての記述がどの様なものであるか、諸文献より主だった例を挙げてみたい。

『尚書』金縢には次の様に述べられている。

(一) 秋大熟、未穫。天大雷電、以風、禾盡偃、大木斯拔、

邦人大恐。〈中略〉王出郊。天乃雨反風。禾則盡起。

(秋大熟し、未だ穫らず。天大いに雷電し、以て風し、禾尽く偃し、大木斯に抜け、邦人大いに恐る。〔中略〕王郊に出づ。天乃ち雨ふり風を反す。禾則ち尽く起く。)

秋の收穫の前に大風が吹き、稲は全て倒れ大木さえも抜けてしまふ程の被害があったことを言い、王が郊祭を行なうと天は風向を変え稲も起きたとしている。

『礼記』では次の様なものが挙げられる。

(一)仲秋〔中略〕行冬令則風災數起。(月令)

(二)仲秋〔中略〕冬令を行はば則ち風災數は起く。

(三)天地之道、寒暑不時則疾、風雨不節則饑。(樂記)

(四)天地の道、寒暑時ならざれば則ち疾あり、風雨節あらざれば則ち饑あり。

(二)は仲秋の時に冬の政令を行なえば、北風による風害が起きるとする。同様のことが『呂氏春秋』仲秋紀や『淮南子』時則訓にも見えている。(三)では、風に節度がなければ農業が影響を受け民は饑饉に陥ることを言う。

『春秋左氏伝』には次の様にある。

(四)日月星辰之神則雪霜風雨之不時、於是乎禱之。(昭公元年)

(日月星辰の神則ち雪霜風雨の時ならざれば、是に於

いてか之を禱む。)

ここでは日・月・星の諸神が風を支配しており、吹く時期が乱れた場合に諸神を祭るとしている。

『管子』には風雨についての記述が多く見られるが、例えば次の様なものが挙げられる。

(五)飄風暴雨數臻、五穀不蓄、六蓄不育。(小匡)

(飄風暴雨數は臻り、五穀蓄<sup>し</sup>らず、六蓄育たず。)

(六)飄風暴雨、爲民害、涸旱爲民患、年穀不熟歲饑。糴貸貴、民疾疫。當此時也、民貧且罷。(小問)

(飄風暴雨、民害を爲し、涸旱民患を爲し、年穀熟さ

ず歳饑あり。糴貸貴く、民疾疫あり。此の時に当りてや、民貧にして且つ罷む。)

(七)宜穫而不穫、風雨將作、五穀以削、士民零落、不穫之害也。(輕重己)

(宜しく穫るべくして穫らず、風雨將に作きんとし、五穀以て削られ、士民零落するは、穫らざるの害なり。)

(五)、(六)では暴風雨のために農作物が被害を受けることを言い、(七)ではやはり暴風雨のため收穫の機会を逸して饑饉に見舞われるさまが述べられている。当時の強風による農作物の被害が具体的によく解る記述である。『管子』は齊

の書であるが、ここに挙げた例の他にも風についての記載が多い。本稿に取り上げた強風表現を持つ『詩経』十一例の内、五例までが邶風、即ち衛國に属しており、衛と斉という隣り合わせの二國の記述に風の記述が多く見られることは、類似の氣候が原因となっているのであろう。

『墨子』尚同上には次の様にある。

(凡) 今若天飄風苦雨溱溱而至者、此天之所以罰百姓之不上同於天者也。

(今天の飄風苦雨溱溱として至らしむるが若きは、此れ天の百姓の天に上同する者あらざるを罰する所以なり。)

天に追従する者が無い時に罰として天が人間に強風を与えると考えているのである。

『莊子』秋水には次の様に述べられている。

(凡) 風曰、然。予蓬蓬然起於北海而入於南海也。〈中略〉

夫折大木、蜚大屋者、唯我能也。

(風曰く、然り。予れ蓬蓬然として北海に起こりて南海に入る。〈中略〉夫の大木を折り、大屋を蜚ばすは、唯だ我のみ能くすと。)

冬の季節風が吹くさまが述べられているが、その強さは前掲(一)の『尚書』の例にもあった様に大木を折る程強く、

人家の屋根をも飛ばす程であったことが理解できる。

『淮南子』には次の様なものがある。

(十) 天之偏氣、怒者爲風。〈中略〉人主之情、上通天。故

誅暴則多飄風。(天文訓)

(天の偏氣、怒れる者は風と爲る。〈中略〉九月政を失せば、三月春風濟らず。)

(廿) 正月失政、七月涼風不至。〈中略〉九月失政、三月春風不濟。(時則訓)

(正月政を失せば、七月涼風至らず、〈中略〉九月政を失せば、三月春風濟らず。)

(廿) は、天の気が調和を失って怒ると風となり、天は人主の意を知り、人主が民を苦しめれば疾風を多く吹かせるとしている。ここにおける強風は天の怒りを示すものである。(廿) では政令を誤ると季節の正しい移り変わりが行なわれなくなることと言う。

最後に『韓詩外伝』卷二にも次の様な記述がある。

(廿) 傳曰、國無道則飄風厲疾、暴雨折木。

(伝に曰く、國無道なれば則ち飄風厲疾にして、暴雨折木あり。)

國の政治が混乱すると強風が吹き激しい雨が降ったり木を折るとし、政治の混乱と天候を結びつけて考えている。



以上の諸例から考えれば、当時の人々にとって風は天意を受けて起きるものであると考えられ、特に天の怒気が強風になるとされていたのである。そしてこの様な強風によってもたらされる風害の原因を政治と結び付けて解釈し、政治が混乱し調和が乱されれば強風が起きると考えたのである。

強風による風害の具体的現象としては、強風は木を根こそぎ倒したり、屋根を吹き飛ばす程の力を持ち、農作物を吹き倒してその生育を防げたり、収穫直前の作物に被害を与える等のが起きていたのである。

この様に強風が生活の上で現実には猛威を振るう中で、前掲『詩経』十一例は詠じられたのであるから、強風を形容する時に用いられる「習習」、「発発」、「暴」等の言葉には当時の人々の強風に対する実感的恐怖が込められていると言っても良いであろう。

当時の人々にとって、実質的な被害を与える強風は人々に憂いをもたらすものであるということが共通の実感であり、共通の理解であったと言える。

### まとめ

これまで述べて来た様に、中国では特に冬に強い季節風

が吹き、低温・砂塵・強風によって農作物に被害を与え、夏の季節風も時として水害や干魃をもたらし、春から夏にかけては乾熱風により農作物に被害が出ることもある。

この様な環境の下で農業を社会基盤にしている人々にとって、風害は生命をも脅かす深刻な問題であった。風害の発生によって農作物が被害を受け、それによって饑饉等ももたされたのであった。それ故人々は風を神として祭り、強風を宥めようとしたのである。

こう言った状況の中で第一章に掲げた『詩経』の十一例の詩は詠まれたのである。

もう一度、各詩の風と内容について見るならば、「寒風が吹きすさぶ」の後に自分の苦しい気持ち、「一日中吹きつける風」の後に自分の傷心、「南から吹く大風」の後に母親の苦勞、「谷から吹きつける暴風」の後に棄てられた女の苦しみ、「北風が吹く」の後に邪悪さに満ちた現状から去りたいという気持ち、「風が激しく吹く」の後に心の中の傷み、「つむじ風の様な者」の後に掻き乱される心、「疾風が吹く」の後に自分だけが苦しい目に遇うこと、「疾風に向って歩く」と「大風が急である」の後に国の混乱を憂う、と言うものである。

これらの詩は、まず強風表現があり、次に憂苦の内容が

述べられると言う形式を持っている。強風は当時の人々にとって農作物に対して被害を与えたり、家屋を破壊する等、常に不安と懼れをもたらす要因であり、この様な強風に対する認識は、人々にとって共通したものであった。

そこで人々は、不安や懼れを掻き立てる強風のさまをうたうことによって、より一層効果的、実感的に詩の本旨である憂苦の気持ちを他者に伝えることができると考え、この様な強風表現を用いたのである。

『詩経』における強風表現を持つ十一の詩には、当時の人々の生活実感から来た風に対する意識が詠み込まれているのである。

#### 注

- (1)この点について松本雅明氏は小雅の谷風・蓼莪・四月の三例を引かれ、強い烈しい風が何らかの意味での恐怖に結びついていることを示すと指摘しておられる(『詩経諸篇の成立に関する研究』上(一九八〇年、開明書院)二二九～二三〇頁)。
- (2)『詩経通論』卷三。
- (3)『詩経原始』卷三。
- (4)『詩経通義』邶風谷風。
- (5)『毛詩伝箋通釈』卷二十六。
- (6)松本氏前掲書二二八～二二九頁。
- (7)『詩経訳注』下(昭和五十八年、龍溪書舎)一〇〇頁。

(8)劉世氏によれば夏の湿潤な季節風による「炎風暑雨」の気候は農作物に有利である(劉世著、近藤康男、藤田泉訳『中国農業地理』(一九八四年、農山漁村文化協会)四一頁)。

(9)畠山久尚監修『アジアの気候』世界気候誌第一巻(昭和三十一年、古今書院)二二頁。浅井謙次監修、人民中国編集部編『中国の地理』(一九七五年、築地書館)九八頁。

(10)前掲『中国農業地理』五七頁。

(11)中国科学院地研究經濟地理研究編著『中国農業地理総論』(一九八一年、科学出版社)三五〇、四〇二頁。

(12)張秉権「殷代的農業与気象」『中央研究院歴史語言研究集刊』四二(民国五十九年)。

(13)王毓瑚氏は中国農業の自然条件は悪く、水・旱・風・雹等の害に晒されていたとされる(王毓瑚「我国自古以来的重要農作物(下)」『農業考古』一九八二年一号)。

(14)胡厚宣「釈殷代求年於四方和四方風の祭祀」『復旦学報(人文科学)』一九五六一(一九五六年)。

(15)陳夢家氏は「其學大風(其れ大風を學めんか)」「學風、北巫大(風を學むるに、北巫に犬か)」等の卜辞を示しておられる(陳夢家著『殷虚卜辞綜述』(一九五六年、科学出版社)五七五頁)。

(16)守屋美都雄氏は『晉書』の記載から、山西・河北地方では寒食の頃、疾風甚雨が起り易かったとされており(守屋美都雄訳注『荆楚歳時記』(一九八七年・平凡社)九九頁)、これもこの地域が強風に見舞われ易かったことを示す一例となる。

※本稿は文部省科学研究費補助金(奨励研究A)による研究成果

の一部である。

(筑波大学大学院博士課程後期)